松前の昔話

豊橋技術科学大学　平松 登志樹

1．はじめに

昔話は地域に特有な大切な資源である。実際今も昔話収集中の地域があり地域計画への取り込みかたが模索されている。本研究では北海道松前町の昔話を紹介しその特徴にせまってみたい。

2．松前の昔話の特徴

松前の昔話は次のようにはじまる。

「500年もの古い歴史をもつこの松前。その中に遠い祖先のむかしから，悲しく，勇ましく，たのしく，面白く……ちょうどそれがあや織り糸のように語り継がれてきた伝説が数多くみられる」[1]。

松前の昔話は藩内の権力闘争の物語が多く，民衆と直接つながりのあるものが少ない点が特徴といわれる[1]，アイヌからの伝承もすくない[1]。松前町史編集長の永田富智氏は，松前は城下と在方に別れるが特に在方の昔話が少なく現在昔話を収集中である。ただ現在集まった昔話からでも永田は庶民の感情を捉えることができるという。例えば松前で一番強烈な昔話といえる門昌庵物語には封建領主への庶民の怒りが感じられるという[2]。永田が書いた城下の昔話とその地点を次に示す。

図－１　城下の昔話

本研究では，いくつかの昔話を対象とし，永田氏をはじめ松前在住の人のヒアリングをもとに昔話に対する住民の意識を調べた（1995年3月3日～7日）。

昔話は各時代の人の悲しさ，勇ましさ，たのしさ，面白さ……を取り込む生き物であるので，当然，平成の今の松前住民の感じかたを調べることに意味がある。

3．門昌庵事件（1678）

旅行しようとすると雪，雨が降る。交通事故がおきる。こんな時松前町の人は今でも「門昌庵の祟り」という。あまり口にするなという人もいるほど強烈な松前の昔話[3,4]である。概略を述べると以下のようになる。

法幢寺住職であった門昌柏岩和尚は，延宝６年「僧門の身でありながら侍女松江と不義をなし，既に斬罪になるべきところを，寛大な思召しから当熊石に配流されたことを御慈悲とも思わず，殿を呪詛するとは不届千万，依って死罪申しつける」という上意を受けて，少しも動揺することがなく「上意畏まりました」とただ一言いい，最後の読経の後首をきられた。首がきられた小川は逆流し，晴天だった日は豪雨が降り出し，首を持ってかえる一行がとまった江差の宿の円通寺は，首桶から出た炎によって天井が焼けた。悪臣どもが，門昌庵の首は眉毛一本も焦げていなかったことを報告すると，藩の重臣は首は熊石に送り返すように命じたのである。藩主の松江への恋心につけこみ藩を牛耳ろうとした悪い家臣の策略に藩主がはまったとされるが，その後も悪臣の変死や気狂い，盲目，狂暴な子供が生まれたという。（以上参考文献3，4より）

現在，遺品はすべて熊石町雲石山門昌庵に移されたという。平成５年３月７日私は役場の人２人と学生ともに熊石町に向かった。松前から車で２時間ちょっとかかった。ところで私の宿泊場所の矢野旅館の従業員の一人は，熊石にいくといったら「ひえー」という声を上げた。いったらいけませんかといったら「いえ・」と口篭った。気味悪がる人がいれば藩主を馬鹿にする人もいる。松前商工会青年部部長の川原敏敬氏は「松前の藩主は半主といわれる。半人前でなさけない奴だ」といった。

雲石山門昌庵の僧は，血脈等曹洞宗において三物といわれる遺品が残されているのは不思議という。死ぬ時納棺されるものであるからだ。また僧は，「我々は門昌庵に不義がなかったと信じている」と述べた。

4　闇の夜の井戸

松前家１０代矩廣の時代。お殿様はみんなと夜毎夜毎お酒を飲み遊興に耽る毎日が続いておりました。柏岩和尚も処刑され家老の変死者が５人もあり，その他にもいろいろ悪いことが起こり幕府からも目をつけられていました。とはじまる[1]。一人の忠義の家来がいたが「殿様が大事な鉄扇を井戸におとされたので取り上げてくるようにとの殿の御命令だ」と悪い家来にいわれ井戸にはいったところ上から大きな石が投げいれられて，井戸の中，鬼と化したという話である。忠義の家来は松江の兄の丸山愚治郎兵衛という説もある[3]。

闇の夜の井戸は現在は大きな木のそばにありテレビ番組のミステリースポットとして紹介された。霊能者といわれる宜保愛子が1992年春頃，本来あった位置を探した。宜保愛子は今の場所といったが，永田は実は別の場所にあるという。２ヶ所の説があり１ヶ所はイベント場としてつぶした。ただし井戸の木枠は本物と述べる。

図－２　闇の夜の井戸[1]

ところで永田は自分が小学生の頃（1929～1934頃）小学生は大掃除の時に闇の夜の井戸を使用したという。普段は使わないが，大掃除の床ふきの時水が足りなくて別の井戸は人が並んでいるので闇の夜の井戸から水を汲んだ。水を飲んだ生徒もおり小学校の先生はしかたなく使わせていたという。手長池の怪という怪しげな名前の別の昔話がある場所付近にはそのおもかげはなかった。松前の役人によれば，手長池は水のたまる湿地帯にあって農家が貯水池，灌漑用水として利用していた。農家の住宅の裏手にあったが今はほとんど水もないのではと述べた。

5　茂草の石神様

この話しは数少ない在方地方の話しである。ヌカモリ山という小山があって，子供が毎日御神体を山の上から何度もころがして遊んでいた。御神体は子供が大好きだったらしい。ある日のこと子供に「ばちがあたるぞ」と注意した女性がいた。子供は神様と遊ばなくなり神様はさびしくなってその女性の目をみえなくした。女性は神様に謝り目がみえるようになった。子供たちはまた神様をころがすようになった[1]という。永田は円空仏ではないかといった。

6　まとめ

昔話と人間は折重なって新たな昔話を創造する。松前の昔話は松前の地域特性に影響を受ける。まず松前は12世紀中頃から始まる山丹交易の一つの拠点だった[5]。次にまつまえ観光ガイドMAP[6]は，松前の住民の多くは松前藩成立時,津軽や秋田から生活苦のため新しい生活の場を求めた人だったこと，米のとれない松前藩は交易によって成立したこと，1643年以降近江商人の出店が増えその後松前藩の経済の深部に商権をはりめぐらしたこと，海峡をへだてた内地との独立性が地域特性として挙げる。

権力闘争から生まれたとされる門昌庵物語，闇の夜の井戸物語は藩自体が経済の復興しつつある時代だった。悪い家臣がいたことそして好き放題陰謀を実行できたのも内地との独立性という特徴によるか，または武士が交易という仕事をおこなっていた歴史，近江商人とのかけひきから生まれたものか。悪いといわれる家臣は，商人にいいように利用される藩主を見切って藩の立て直しに努めた家臣だったのかもしれない。

松前の昔話は地域の様々な特徴がまざりあって色濃く残る日本の貴重な資源である。

参考文献

1.榎森進,道家庸熙,浅利政俊(1973),北海道の古都
松前ーその歴史を訪ねてーpp.84
2.永田富智(1987),熊石町史,p148
3.北海道松前史秘話(1987)松前門昌物語，松前法幢寺
4.家伝門昌庵縁起による伝説　門昌庵物語(1933)
（現代かなづかい版）
5.日本海と北国文化(1990) ,海と列島文化1小学館，
pp.269-286
6.まつまえ観光ガイドMAP